

## 原著論文

# 多世代交流による育て合いの実践としての 子育てサポート活動の紹介と縦断的な効果の検討

中京大学心理学部 小島 康生  
中京大学心理学部 水野 里恵  
神戸女子短期大学 塚田みちる  
鈴鹿医療科学大学 渡部千世子  
中京大学心理学部 長谷川有香  
愛知江南短期大学 富貴田智子

A child-rearing support program for undergraduates as a form of multigenerational exchange and its longer-term effects on participants

KOJIMA, Yasuo (School of Psychology, Chukyo University)  
MIZUNO, Rie (School of Psychology, Chukyo University)  
TSUKADA, Michiru (Kobe Women's Junior College)  
WATABE, Chiyoko (Suzuka University of Medical Science)  
HASEGAWA, Yuka (School of Psychology, Chukyo University)  
FUKITA, Tomoko (Aichi Konan College)

This article introduces a child-rearing support program for undergraduates. The program started in 2009 and is still offered at Chukyo University. We discuss the schedule, procedures, and apparent significance of the program. We considered that the most important feature of the program was that people of different ages (i.e., mothers with their infants and college students), interacted with each other, and benefited from those interactions. Next, we used an online survey to examine how their experiences in this program while at the university affected the lives of 29 graduates over the 4 years since their participation. Our examination focused on three main issues: job-hunting, issues in the workplace, and interpersonal relationships. The survey results revealed that most of the student participants used the program in promoting themselves to prospective employers while job-hunting. Some participants reported their experiences in the program helped them in interactions with mothers and their young children in the workplace as well as in close interpersonal relationships. Additionally, some participants said their experiences improved their interactions with other people in general, in that they more fully considered the feelings and perspectives of others. Several of them stated that it was now easier for them to view their current situation in terms of lifelong personal development. These results were considered to reflect the effects of multigenerational exchange between mothers with their infants and college students.

Key words: child-rearing support program, undergraduates, multigenerational exchange, follow-up study

## ・ 学生子育てサポート活動の概要と特色

### 1. 本活動実施に至る背景

わが国では、少子化の進行に伴って乳幼児に触れる機会が著しく減少しており、わが子に接するまで乳幼児の世話をしたことが一度もなかったという人の割合がたいへん多い(原田, 2006)。育児不安の深刻化や子どもの虐待の増加など、子育て家庭をめぐる諸問題の根底には、子どもとの接触経験が圧倒的に不足した状態で親になる人が増えている現状が

関係しているという指摘があり(糊澤・福本・岩立, 2009)、2000年前後からは、“予防策”の一つとして、近い将来、子育て世代になっていく青年たち(中・高校生など)を対象にした「子どもふれあい体験」が各地で行われるようになった(藤原・猪野, 2002; 佐藤, 2004; 藤後, 2007など)。学校での取り組みとしては、家庭科などの授業の一環で、幼稚園や保育園、子育て支援センターなどに生徒が向うくものが多く(鎌野・伊藤, 2008; 大路・松村, 1998; 岡野, 2006; 佐藤, 2004)、講義形式の事前

学習や人形を使った模擬体験、ビデオ研修などが導入されることもある（藤原・猪野，2002；吉村，2006；伊藤・塚本，2015）。

以上の通り、全国各地で広がりを見せる「ふれあい体験」だが、成果報告は、中高生を対象にした取り組みに集中している。その理由としては、中学と高校の学習指導要領に、乳幼児とのふれあい体験や交流を積極的に推進するよう示されたことや（文部省，1999，2000a），同じ時期に出された中央教育審議会報告に、「子育ての大切さ，親の役割，更には地域の一人としての近隣の子どものかかわり方等について考えさせる『子育て理解教育』という視点を持って，これらの学習を教育課程全体の中で適切に位置づけ，教育活動の展開を図る」よう記載されたことなどがあげられる（文部省，2000b）。つまり，一般市民や民間から声があがり，ボトムアップ的にそうした取り組みが展開したというよりは，上意下達の方に沿う形で，家庭科などの「授業科目」にそれらの取り組みが組み込まれたといった色合いが強い。

一方，中高生以外の若者，すなわち大学生や専門学校生等を対象にした取り組みも一部にみられる。だが，そうした取り組みの多くは，職業上，子どもと関わる機会が多い保育系や看護系の学生を対象としたものであり（川村・森，2006；岡田，2007など），一般大学生などを対象にしたものはたいへん少ない（川瀬，2009；岡野，2005；谷向，2010など）。しかも，この種の「ふれあい体験」は，幼稚園・保育所等，集団場面での不特定多数の幼児との関わりや遊びに特化したものが多く，子育ての主要な現場である家庭をベースにした取り組みは皆無に等しい（例外として，川瀬，2009；三林，2005）。本来，子ども（特に乳幼児）の生活拠点は家庭にほかならず，そのうえ多くの若者が将来的に子どもを持ち，いつもすぐそばに子どもがいる日常を経験するようになっていくことを念頭に置くなら，家庭を軸とするふれあい体験がほとんど実施されていないことは看過できない問題といえる。以上のことを踏まえ，第一著者（小島）は，若者一人ひとりが，これから歩いていく人生をも見据えつつ，なおかつ子育ての具体的な日常に触れられるような体験の場を提供することを主とした「学生子育てサポート活動」の立ち上げを行った。

表1 これまでに子育てサポート活動に参加した学生と受け入れ家庭の累計

実施年度	参加学生数 <sup>a</sup>		計	受け入れ家庭 <sup>b</sup>
	女子	男子		
2009	26	4	30	18
2010	21	2	23	20
2011	30	8	38	30
2012	29	4	33	27
2013	27	2	29	27
2014	24	1	25	23
2015	19	11	30	23
2016	24	4	28	24
合計	201	35	236	192

a：のべ人数 b：のべ家庭数

## 2. 学生子育てサポート活動の立ち上げと「発達心理学実習」の取り組み

この学生子育てサポート活動は，2008年に中山隼雄科学技術文化財団から得た助成金をもとにスタートしたことに端を発する。附属中京高等学校の生徒を対象とした“高校生バージョン”と，心理学部の学生を対象にした“大学生バージョン”の二本の軸を構成し，前者は2009年度と2010年度の2回，後者は2009年度以降，現在まで継続して実施してきた。

本稿で取り上げるのは，後者の大学生バージョン，すなわち家庭参入型のふれあい体験の取り組みについてである（“高校生バージョン”の詳細は，小島・水野・塚田，2011をご覧ください）。具体的なスケジュールや内容は後述の通りだが，初年度を除く2010年度以降は，心理学部の学部固有科目（選択科目）として位置づけ，3・4年次配当の「発達心理学実習」という講義名で実施してきた。すなわち形式的には，この授業の履修者がそれぞれに一家庭を担当し，一定期間，家庭訪問による実習に参加することとなる。表1の通り，これまでにのべ230名余りの学生がこの実習に参加してきた（2016年度までの累計）。

## 3. スケジュールと進め方

### (1) 受け入れ家庭の募集と担当学生とのマッチング

表2は，「発達心理学実習」の運営スケジュールの概要を示したものである。本実習は，原則として学生各人が一家庭を担当し，5月初旬から11月下旬までの約7ヵ月間，月に1～2回のペースで担当家庭の母子らと関わりを持つという内容で構成されている。受け入れ家庭の募集に関しては，名古屋市

表2 発達心理学実習の全体スケジュール

時期	内容
3月下旬～	受け入れ家庭の募集案内の実施。メール、FAX等で随時、募集を受け付ける。
4月上旬	履修学生の決定。これにより、受け入れ家庭と担当学生のマッチングを行う。
4月下旬	担当学生と受け入れ家庭の母子との顔合わせ(“顔合わせの会”)。
5月上旬	家庭訪問等、実習の開始。
5月(～11月)	各自、実習を継続。また、月1回の報告会に参加して、情報交換等を行う。
10月上旬～	“お礼の会”の企画・準備。
12月上旬	“お礼の会”の開催。
1月上旬	最終レポートの提出。このレポートは、受け入れ家庭にも郵送で届ける。

**中京大学・学生子育てサポーター 協力家庭募集!**

発達心理学を学ぶ大学生の実習にご協力ください!学生がご自宅に伺って、お子さんと遊んだり、家事・育児のお手伝いなどをします(お子さんのみ残して保護者が外出することはできません。託児ではありません)。子ネットと中京大学とのコラボ企画も6年目、のべ100家族以上に訪問し、学生にも子育てで家庭にも大好評のプロジェクトです!

対象:天白区とその近隣在住の方で、一番小さいお子さん(一人目でもOK)が1歳過ぎまでの方、先着25名。

時期:GW明け～11月末までの半年で7～8回、平日の2時間程度、学生が訪問。費用:申し込みは無料、学生への交通費、茶菓子、謝礼等は必要ありません。

説明会 4/24(木)10時半～12時、天白区在宅サービスセンターにて。学生と顔合わせし、日程調整を行います。

申し込み:中京大学心理学部小島研究室 ykojima@lets.chukyo-u.ac.jp  
ご連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)とお子さんの人数・月齢(年齢)・名前(読み方も)をお知らせください。4/20(日)締切。

活動の例:お子さんと遊ぶ、だっこする、おむつを換える、離乳食をたべさせる、絵本を読む、お散歩する、いっしょに公園に行く、予防接種に同行する、買い物に同行する、お母さんに子育ての様子を聞く、上の子と遊ぶ、上の子の幼稚園に迎えに行く、上の子の宿題を見てあげる等。



図1 「PAKUっ子」に掲載された受け入れ家庭募集の記事(2014年4月号)

写真1 学生と受け入れ家庭の母子との“顔合わせ会”の様子

天白区で活動する子育て支援団体「天白子ネット」(<http://mymimosa.net/tenpaku-konet/>)の全面的協力を得て、本団体が毎月発行する子育て情報誌「PAKUっ子」への募集案内の記事の掲載に加え(図1)、本団体のホームページにも同じ記事をアップしてもらっている。本情報誌の発行部数は3,450部(2017年3月時点)を数え、児童相談所、保健所ほか、子ども連れの親子がよく訪れる天白区内外の施設等180カ所(同じく2017年3月時点)に置かれることもあって、これを見て応募してくださる方が多い。例年、申し込み期間の1ヵ月弱の間に、20～30程度の家庭による応募がある。

一方、担当学生は、原則、本実習の履修者である。受け入れ家庭とのバランスを考えて定員を設けているが(30人)、例年、履修者は20～25名程度で安定している。女子学生の割合が高いが、男子学生の履修登録もあり、男子学生が10名を超えた年もある(表1参照)。なお、受け入れ家庭の応募数に比して学生数が不足することが多く、その際は、前年度の履修者や発達心理学領域のゼミに所属する学生等に個別に依頼して参加してもらっている。

授業では、4月初めのガイダンスのあと、2週程度、講義を行い、この科目を担当する発達心理学領域助教と筆者、ならびに保育系短期大学教員(本稿第6著者)で、乳幼児期の子どもの発達や訪問にあ

たっての注意事項等の指導を行う。4月下旬に、担当学生と受け入れ家庭の母子の顔合わせを行い(“顔合わせの会”と呼んでいる、写真1)、5月中旬ごろから実習をスタートするのが例年の流れである。

(2) 活動開始にあたっての注意事項

本実習では、第三者である学生が一般の子育て家庭に参入することを基本とするため、さまざまな面での配慮が不可欠となる。第一に、参加する学生には必ず保険に加入してもらおう。訪問の道中で事故に遭ったり、訪問中、子どもにケガをさせてしまったりといった不測の事態に対応するためである。第二に、男子学生は必ず女子学生とペアを組んで担当するよう指導している。多くの家庭はまだ授乳中で、男性が一人で訪問することには抵抗を示される方もいるためである。第三に、訪問のペースは月1、2回と定め、訪問時間も原則2時間程度としている。頻回の、また長時間の訪問は、双方にとって心理的負担になりかねない。そうしたことに起因するトラブルは避けたいと考えてのことである。第四に、受け入れ家庭の母親には、訪問のたびに特別な準備をしていただく必要はないと伝えている。あくまで普段通り、いつも通りの日常を体験させていただくのが、本実習の特色である。第五に、託児ではないため、学生と子どもだけにして、母親が外出するといっ



写真2 経過報告会のようす



写真3 “お礼の会”のようす

たことは控えてほしいと周知している。当然のことながら、学生は特別な知識やスキルを持った専門家ではない。母親が不在の間に事故が生じた場合に責任を負うことができないため、必ず目の届くところにいてほしいと伝えている。屋外での活動においても同様である。

(3) 授業内容 - レポート提出、情報交換会への参加、ならびに課題発表

履修学生には、訪問のたびにレポートを提出するよう指示している。その日、行った活動、よかったと思うこと、うまくできなかったこと、印象に残ったこと、次回の訪問に向けての課題などをA4用紙1~2枚程度にまとめて提出するよう指導している。

また、月に1回は、経過報告会と称して全員が集まるよう指示し、この報告会で各自の近況報告などを行う(写真2)。担当家庭の子どもの月齢が近い者どうしでグループ討論をすることもある。

さらに、夏休み前には4~8名程度からなる班を構成し、班単位で話し合って調査課題を設定してもらい、その課題に沿ったデータを履修者全員が収集してくるよう指導する。集まったデータは、班員で協力して整理し、先行研究なども踏まえて秋学期の最初の授業で発表させることにしている。例えば最近では、鏡に映る自分をどのように認知するかを実験的に確かめようとする調査を実施した班があった。これは一般に、自己認知の発達を調べるときに行われる「鏡像認知実験」と呼ばれるものをモチーフにしており、本人に気付かれないよう子どもの額にシールを貼り(ルージュでマークする場合もある)、鏡の前に連れて行って、その反応を確かめるというものである。詳細は省くが、ある時期を過ぎると、鏡を見ながら自分の額を触る反応が見られるようになり、それが、客観的自己理解の指標とされる(Amsterdam, 1972)。この実験を計画した班のメ



写真4 メッセージカード

ンバーが履修者全員にシール(赤色など目立つものを使う)を配布し、それぞれの訪問家庭で小実験を実施してもらったのち、反応を記録したデータを件の班員が集約してまとめ、発表した。訪問家庭の子どもの月齢はさまざまであるため、集まったデータを月齢の進行に沿って並べると、自己認知の発達過程が確認できることになる。手続き上の統制まではできないため本格的な“研究”のレベルには届かないが、講義で聞いたり本を読んで知識としてはわかっていたことについて、じっさい自分たちでデータを集め、整理・発表する経験は、学生たちにとってたいへん有益と考えている。

(4) お礼の会

秋学期に入ると、12月に行われる“お礼の会”の準備に入る。この会の趣旨は、半年余りにわたって実習に協力してもらった家庭の母子を招いて、感謝の気持ちを伝えることにあり、企画から運営まですべてを履修学生が行う。5~8名程度のメンバーで班を構成し、歌や踊り、劇、製作など、乳児期の子どもと母親たちに喜んでもらえるような企画を立てて、実施する(写真3)。

心理学部の学生は、このような会の企画や運営に携わったことがない者が大半である。そのため、本稿第6著者の富貴田を中心に指導が重ねられ、試行

錯誤を経て当日を迎える。会の最後には、学生が心を込めて制作したメッセージカード(写真4)を担当家庭の母子にお渡しして、終了となる。

#### (5) 本実習の特色

以上では、本実習の取り組みをかいつままで紹介したが、その特色を整理しておきたい。第一に、子育ての現場である家庭を中心に、生活の文脈に学生が参入し、日常的な子育ての様子を身をもって体験できること、ならびに比較的長い期間にわたって同一の家庭を担当することから、成長過程の子どもの姿や親子の関わり合いの変化をじかに観察できること、である。訪問の間隔は約1ヵ月だが、このペースは、乳児期の子どもの著しい成長を目の当たりにするには最適と考える。レポートにもよく「先月は〇〇だったが、今回は だった」といった記述があり、学生にとっては、この子どもの成長スピードが最も印象に残るようである(小島ら, 2011)。

第二の特色は、地域との連携のもとでの取り組みを続けている点である。いうまでもなく、この実習は、受け入れ家庭の存在なしには成立しない。地域の子育て支援団体の協力があってはじめて受け入れ家庭の確保が可能となり、また学生を地域に送り出すことができる。このように考えると、本実習は、大学を拠点とする地域貢献活動の一つとしても位置付けることができよう。事実、本実習の取り組みは、大学周辺の地域ではかなり地名度も上がってきており、口コミなどを通じて応募してくださる方も多い。また、第一子の時に協力を申し出てください家庭が、1年、2年の間隔を経て第二子の時にも応募してくださるケースも増えている。これまでの受け入れ家庭数は192にのぼるが(表1)、この中には複数回、応募してください家庭が“リピーター”家庭が14含まれ、なかには3回協力してください家庭もある。

第三に、上述したことも関係するが、この取り組みは、多世代交流を意図的に創発する「仕掛け」の一種ともとらえることができ、それがそれぞれの世代に多くの刺激を与えている点が特徴といえる。世代間交流をめざす活動は近年ますます活発化しており(金田, 2005; 草野, 2004など)、理論的な枠組みについての整備も進められているが(例えば, Newman, 1997)、高齢者とそれより若い世代の人々(主に乳幼児期から児童期にかけての子ども)との交流を主としたプログラムが圧倒的に多い。その成

果や課題についての詳細は省くが、おおむね参加したすべての人々に互恵的メリットがあり(藤原, 2012)、相互の発達が進められることが指摘されている(金田, 2005)。本実習の場合、子育て世代の母親と学生、そして子どもという3つの世代の交わりが特徴といえ、学生には親準備性の発達が確認されているほか(小島ら, 2011)、受け入れ家庭の母子にもプラスの効果が想定される。じっさい本実習に参加協力をいただいた母親たちからは、「ふだん接することのない大学生世代の若者と接することで、気分転換になりリフレッシュできた」、「担当学生とのふれあいを通じてわが子の新たな一面に気付くことができた」といった意見や感想をよく耳にする。

一般に、各人が日常を過ごす生活世界は、自分が発達段階上のどのステージにいるかによって分断されている面が大きい(小島, 2013)。本実習に即して考えると、そもそも大学生が日常を過ごす場と子育て世代の人々が日常を過ごす場とは、基本的には交わらない部分が大きく、その傾向は都会においてほど顕著と考えられる。この実習への参加は、大学生にとっても子育て期の母親にとっても、また子どもにとっても、通常ならば交わり得ない異世代との交流を経験する機会を提供し、それが互いにとっての刺激になっているものと考えられることができる。そうした交流が起爆剤となって、さまざまな事柄への気付きや発達が推し進められるのではないかと筆者は考えている。

### 「学生子育てサポート活動」への参加は長期的にどのような効果をもたらすか

#### 1. 問題と目的

本稿前半では、学生子育てサポート活動(講義としては「発達心理学実習」)の立ち上げや具体的な取り組み内容、またその意義について述べてきたが、後半では、この活動に参加した学生(当時)が、数年たってそのことを、それぞれの生活においてどう意味づけているのか、について調べた追跡研究の結果を報告する。

冒頭にも述べた通り、中高生をはじめとする若者を対象にした子どもとのふれあい体験実習は、これまでもさまざまな形で行われてきた。だが、その効果の検討に関しては、実習への参加の直後に意識がどう変わったかをインタビュー形式、あるいは質問紙等で確認するのみにとどまっている。本来なら

表3 実習終了後の学生と受け入れ家庭との交流

内容	該当者 (人)		
在学中の訪問	訪問した	13	
	訪問回数		
	1, 2回	6	
	3, 4回	2	
	5回以上	4	
	覚えていない	1	
	訪問しなかった	15	
	覚えていない	1	
卒業後の訪問	訪問した	4	
	訪問回数		
	1, 2回	2	
	3, 4回	2	
		訪問しなかった	24
		覚えていない	1
卒業後のメール・電話でのやりとり	あった	12	
	やりとりの回数		
	1, 2回	4	
	3, 4回	3	
	5回以上	5	
		なかった	17

ば、こうした経験が当人のその後の人生にどのような影響をもたらしたか、という観点でそれを確認する必要があるのではない。

長期にわたる個別的な親子とのふれあいを経験する、本実習のような取り組みには、参加学生のその後の生活や対人関係などにも大きく影響を及ぼすものと予想し、その検討を実施した。

## 2. 方法

### (1) 調査協力者

2009, 2010, 2011 年度に実施した子育てサポート活動に参加した学生 (当時) のうち、調査時点で本人のメールアドレスが確認できた 71 名に対し、調査への協力依頼を行った。このうち 14 名は、送信エラーのため連絡が取れず、結果的にメールを送信することができたのは残り 57 名であった。この 57 名のうち、以下の調査項目に回答が寄せられたのは 29 名 (回答率 50.9%) であった。平均年齢は 25.9 歳 (レンジ: 24 - 28 歳), 男性が 5 名, 女性が 24 名であった。実習に参加したのは、「1 回」が 20 名 (3 年次: 12 名, 4 年次: 8 名), 「2 回」が 8 名 (いずれも 3, 4 年次), 「3 回」が 2 名 (2, 3, 4 年次) であった。

### (2) 調査手続きと質問内容

調査は、2015 年 11 ~ 12 月にかけて、オンライン上で行った。具体的には Qualtrics 社が提供するアンケート作成サービスを利用してオンライン上に調査項目を記したページを作成し、指定したアドレスに直接アクセスしてもらって匿名での回答を求めた。

質問内容は、性別、現在の年齢のほか、実習期間終了後の受け入れ家庭との交流の様子、就職活動に生かされたこと、卒業後の仕事において役立ったこと、対人関係の面で役立ったことなどを選択肢式、および一部、自由記述式で尋ねた。すでに結婚して子育てをしている人に対しては、実習経験がじっさいの子育てにどう役立っているかなども尋ねた。なお、調査時点において子どもがいたのは 2 名のみであったため、本稿ではこれに触れることはできなかった。

## 3. 結果

### (1) 実習を終えた後の訪問家庭との交流

実習期間は、先述の通り、各年度 5 ~ 11 月 (2009 年度のみ 5 ~ 7 月) であった。しかしこの期間を過ぎたのちも、担当学生と受け入れ家庭の母親との相談のうえで、交流を続けるケースがたびたびあった。そのため、実習期間以降の交流の様子を確認した

表4 発達心理学実習への参加が役立ったか

内容	とても役に立った	少しは役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった	覚えていない	未回答
就職活動において	7	9	8	1	4	0
仕事において	3	12	6	3	3	2
対人関係において	7	14	4	1	1	2

表5 実習の経験がどのような面で就職活動に役に立ったか

内容	定義	具体的な記述の例	記述者(人) <sup>a</sup>
自己PR	授業内容や授業で経験したことを履歴書の記述や面接官への自己アピールに利用したという記述	授業が座学中心ではなく、学外の方との交流を中心としたものだったと面接で話した / 幼児教育に関わる職につきたいと希望しており、面接では、授業を通して知ったことや感じたことを話して面接官にも興味を持ってもらえた / 子どもを注意深く観察し、自分で何かを発見して疑問を持ち、考察するという経験を就職活動の面接で話せた	8
(子どものいる) 将来の自分を見越しての職場選び	将来、結婚して子育てをしている自分を想像しながら、職場の条件等を検討したという記述	育児休業の取りやすさを重視した / 復帰後の短時間勤務が可能かを重視した	2
就職活動におけるメンターとしての訪問先の母親	就職活動の経験を持つ先輩の一人として、訪問先の母親にアドバイスを受たり悩みの相談をしたりしたという記述	お母さんご自身の就職活動や社会人経験の話をお聞かせしてもらったり、就活の話をお聞かせしてもらったりする機会があり、年の近い先輩とは違う視点(育休や女性の働きやすさなど)からのアドバイスをもらうことができた	2
自分の進路と関連づけての経験	保育職や幼児教育などに関係した就職先を予定していた学生が、母子と関わる経験から有益な情報や知識を得たという記述	保育職に就きたかったため、小さい子と触れ合う機会があった / 保育士資格試験の勉強中だったため、実際に子どもと触れ合うことができたのはいい経験になった	3

a 記述がなかった回答者もいた。また、同じ人物が二つ以上のカテゴリーに関係する内容の記述を行っていた場合、それぞれに1とカウントした。

(表3)。

在学中の訪問、卒業後の訪問、卒業後のメール・電話等での連絡の3点について尋ねたところ、在学中は約半数(「覚えていない」とする回答を除き28名中13名, 46.4%)が訪問を続けていたと回答した。実習期間が終了した後、在学中に5回以上訪問していた者もいた(4名)。卒業後も訪問を続けていた者は少なかったが(同様に28名中4名, 14.3%)、直近の訪問が調査時点の1年以内であったという者も2名(24歳女性, 26歳女性)おり、卒業から数年がたってもなお交流が続いているケースの存在が確認された。また、対面での交流はなくともメール・電話等でのやりとりを続けている者が相当数おり(29名中12名, 41.4%)、ごく最近メール等でやりとりをした者もいた(3ヵ月以内:4名(24歳女性, 25歳女性, 26歳男性, 27歳女性)、3~6ヵ月前:1名(25歳女性))。

(2) 実習への参加がどのように役立ったか

本実習に参加したことが、その後の生活のさまざまな面に役に立ったかどうかを尋ねた(表4)。就職活動の面で役に立ったと回答されたものは、「とても」、「少しは」を合わせると半数を超えた(「覚えていない」とする回答を除き25名中16名, 64.0%)。どう役に立ったかについての具体的な記述に関し、内容に即してカテゴリー化して整理したところ(表5)、記述が最も多かったのは、「自己PR」であった。また、このほかでは、子育ての現場を自分の目で見て体験できたことが、自分の将来(子育て)を見越して職場の勤務条件を考えるきっかけになったという記述や(2名)、訪問先の母親に就職活動関連の相談ができたのがよかったという記述もあった(2名)。

仕事の面において、実習での経験が役に立ったかを尋ねた設問でも、役に立ったと回答されたものが多く、「とても」、「少しは」を合算すると、15名に

表6 実習の経験がどのような面で仕事に役に立っているか

内容	定義	具体的な記述の例	記述者(人) <sup>a</sup>
母親や子どもと関わるスキル	母親との接し方、関わり方や子どもの扱い方、子どもとの接し方についてのスキルが仕事の面で役に立っているという記述	子どもを持つお母さんと親しくなる機会があったことで、保護者の方と話すことへの抵抗感がなくなった(教育現場)/小さな子どもと接する時に、実習の経験が活かされているなど感じる(図書館)/発達障がいの子と接するとき、定型発達の子がどのような感じだったか思い出して考えることができた点がよかった(療育施設)	8
子どものいる人に特有のニーズの理解やそれに基づく提案	それぞれの職場に応じて、子どものいる人の気持ちやニーズを踏まえた仕事運びができるという記述	未就学のお子さんを連れて旅行される方に対し、宿泊先でどのような配慮がなされているか(子どもの食事、アメニティ)の情報を提供できる(旅行代理店)/子連れのお客さんや妊娠されているお客さんがいらしたとき、どこに気を配ったらよいか考えることができる(幼児教育関連)/子育てがどれくらい大変かを実際体験したことで、お客さんのことが理解できたり、お子さんがいる生活スタイルに合わせた商品提案ができる(接客業)	7
他者と関わるスキル	職場で接する様々な人々との関わりに実習での経験が活かされているという記述	相手の目線に合わせて話をするようになった/お客さんや職場の同僚・先輩の表情の変化に気付くことができ、実習を行う前よりも気遣いができるようになった	4
気付いたことを書き留める習慣	レポート課題の経験が役に立っているという記述	経験したことや感じたこと、疑問に思ったことを書き留めるようになった	1

a 記述がなかった回答者もいた。また、同じ人物が二つ以上のカテゴリーに関係する内容の記述を行っていた場合、それぞれに1とカウントした。

及んだ(「覚えていない」,「未回答」を除くと62.5%)。具体的な記述内容を上記と同様にカテゴリー化してまとめたところ(表6), 母子と関わるうえでのスキルを身につけられたことで仕事上、子どもや子育て中の親に接することが容易になったといった記述が最も多く(8名), 次いで子育てをしている人の立場や気持ちの理解が、職場でのさまざまな提案や活動につながっているとする記述も多かった(7名)。子ども, 母親, 子育て家庭に限らず, より一般的な意味において, 人と接するうえで心掛けるべきことを学んだとする記述もあった(4名)。

さらに, 仕事を除く対人的な関わりに関して, 実習で経験したことが役に立っているか尋ねたところ, 多くの者が役に立ったと回答し, 「とても」, 「少しは」を合わせた人数は21名(「覚えていない」, 「未回答」を除くと80.8%)にのぼった。具体的な記述内容を見ると(表7), 家族や友達など子育てをしている身近な人たちの気持ちがよく理解でき, 共感できるという記述が最も多く(9名), 在学中の実習で身につけた世話のスキル(おむつ替えや離乳食づくり)を生かしてサポートが提供できたとする記述もあった(2名)。また, 身近な人だけでなく一般的に子ども連れの人への関心や理解が深まったとする記述も多かった(5名)。子どものいる人だ

けに留まらず, より広く, 人と接するうえでの留意点を意識するようになったという記述もあった(4名)。このほかでは, 自分の将来の子育てについての見通しやそれを踏まえた現在の自分の生活についての記述や, 育ててもらった親への感謝の気持ちが記されているものもあった(3名)。

#### 4. 考察

本研究のねらいは, 2009年度にスタートし2016年度まで継続して実施している学生子育てサポート活動(講義科目としては「発達心理学実習」)に参加し, その後4年以上が経過している当時の学生を対象に, 在学中の実習参加経験が以後の日常生活や対人関係等にどのような影響をもたらしたかを検討することであった。乳幼児とのふれあい体験は, 2000年ごろ以降, 全国各地でさまざまな形で実施されており, その効果を検討した研究も多数あるが, 数年の時間を経てそうした実習への参加経験が各々の生活にどう役に立ったと感じられているかを調べたものは, 筆者らの知る限り本邦はじめてであった。

まず, 各自が担当していた家庭と実習終了後も関係が持続していたかを確認した。その結果, 少なくとも卒業まで, また一部では卒業後も訪問を続けているケースが確認され, メールや電話でのやりとり



表7 実習の経験がどのような面に対人関係に役に立っているか

内容	定義	具体的な記述の例	記述者(人) <sup>a</sup>
子どもを育てている人の気持ちを汲んだ対応・行動（身近な人物に関して）	きょうだいや友達など身近な人物の子育てに関し、当人の立場や気持ちが理解できるという記述、またそれに即した対応・サポートができたという記述	自分のきょうだいに子どもがいるので、どの場面で助けがいているのか、どう行動すればよいのかがわかった/いとこや友達に子どもができたりする年齢になり、お母さんの気持ちになって一緒に考えるようになった/友人の子どもの世話をしたり話をしたりする際に、当時関わっていた子どもの姿や成長段階を想像すると、相手に共感できる/友人に子どもが生まれたとき、何が大変かが具体的に考えられ、一緒に出掛けるときにサポートしやすかった	9
子どもを育てている人の気持ちを汲んだ対応・行動（一般的な他者に関して）	他人も含め、子どものいる人全般に対し、当事者の立場や気持ちが理解できるという記述	（子育て中の人にとって）悩みや相談などを気軽にできる相手がいる安心感を学んだ/ベビーカーを持って電車に乗ることの大変さがわかるので、駅で見かけたら手伝おうとする気持ちが強くなった	5
子どもの世話の実践	身近にいる子どもの世話を実践したという記述	姉に子どもが生まれ、おむつ交換、離乳食づくりなど手伝えることがいくつかあった/友人の子どもへの対応がうまくできる	2
他者との関わり方や態度の振り返りや修正	一般的な他者と関わるときの態度について振り返り、修正するきっかけになったという記述	相手のために何ができるかを考えて行動することを大切にしようになった/役に立とうと行動するよりも、まずもって迷惑にならないよう行動することのほうが大事な場合があることを学んだ/相手が何を望んでいるのか聴き取り、それに即して関わるのが人間関係の形成において大切であることを学んだ	4
発達軸に即した将来・過去・現在の自分	将来の自分、過去の自分、また現在の自分について考えるきっかけができたことに関する記述	これから結婚・出産することへのイメージが具体的に変わった/子育てしたいという気持ちが以前より強くなったが、その一方で、今しかできないことに目を向けるようになり、仕事に打ち込んだり友達と頻繁に会うようにもなった/(育ててくれた)母親への感謝の気持ちが強くなった	3
家族との対話	家族との対話に関する記述	家族と発達について考える機会が増えた	1
人との出会いや人間関係の広がり	訪問先の母親との出会いやそれに基づく人の輪の広がりについての記述	出会いを大切にしようになった/訪問家庭のお母さんが開催する子育てイベントに参加し、様々なお父さんお母さんと対話することができた	2

a 記述がなかった回答者もいた。また、同じ人物が二つ以上のカテゴリーに関係する内容の記述を行っていた場合、それぞれに1とカウントした。

まで含めて考えると、半数近くが何らかの形で関係を維持していた。ただ今回の調査では、3つの年度（2009、2010、2011年度）のいずれかにおいて、学部3年時ないし4年時に実習に参加した人を対象としていたため、卒業してからの経過年数には3~6年までの開きがあった。そのため、同じ「1年前にメールでのやりとりがあった」という回答でも、卒業からの年数に換算すると2~5年の幅があり、無記名での調査だったこともあって、その年数まで統制した分析ができなかった点はここで述べておかなければならない。とはいえ、個々の対象者の年齢をみると、ごく最近（3ヵ月以内）にメールないし電話をしたという人の中に26歳や27歳の人があり、卒業後かなりの時間が経過しても連絡を続けている人が

いることは確認できた。今後の追跡調査では、個人情報管理に注意しつつ記名式での調査協力を計画するなど、より正確なデータの収集を検討したい。

この活動への参加がもたらした効果については、就職活動において、仕事の面で、そして対人関係の面で、という3点に的を絞って回答を求めた。このいずれに関しても、半数以上の人々が役に立ったと回答したが、なかでも役に立ったという認識が強かったのは、対人関係に関してであった。

どのような点で役に立ったかについて自由記述で回答を求めたところ、就職活動に関しては、自己PRができたという記述が最も多かった。心理学部の授業は、多くが教室での講義形式による内容である。学外に出て、地域の人々と関わる実習形式の授

業は、その点で学生にとっても新奇性が高く、面接官にも印象的に捉えられたのかもしれない。保育、教育関係の職場を目指していた人にとっては、大学で子どもとふれあう授業に参加したことは、大きな自己アピールにつながったものと思われる。

就職に関しては、将来、自分が子育て世代に到達した時期のことを見越して、育児休業などの条件を重視したという記述もあった。就職先を決める際に多くの大学生が最も気にするのは、職場の環境や条件（給与、休暇、勤務時間、転勤の有無など）をはじめ、就職後ただちに自分の生活に直結してくる目先の事柄だろうと思われる。その点で、発達軸の数歩前を歩む母親たちとの関わり（あるいはそうした家庭との交流）は、自分の人生のもう少し先、すなわち5年先、10年先のことを想像することにつながったのではないかと考えられる。後述することとも関係するが、より広い時間軸の中で自分の「いま、ここ」を確認する作業は、青年期の若者のアイデンティティ確立においても重要なことと考える。なお全体に言えることだが、本研究のサンプル数は決して十分とはいえず、推測の域を出ない面が多々ある。今後は、データ数をさらに蓄積していくほか、対照群つまりこの実習に参加せずに、卒業から同じだけの年数が経過した人のデータも比較に加えつつ検討を重ねていくことが必要かと思われる。

仕事面においては、子どもや親たちと関わるうえでの基本的なスキルがいかされたという回答が最も多かった。接客業や教育現場、あるいはそれ以外の職場においても、子どもづれの人たちと関わる仕事は多数ある。本実習に参加し、長期にわたって親子との関わりを経験したことが、そうした一般の子どもや親との関わり、あるいはコミュニケーション・スキルの向上につながったものと思われる。

このほかでは、子どものいる人たちの気持ちを理解できること、寄り添えることが仕事の運用に関しプラスの効果をもたらしているという記述も多数あった。また、そうした姿勢をさらに普遍化し、人と接するうえで相手の立場や目線、気持ちに寄り添うことの大切さを学んだという記述も一部でみられた。こうした態度が身に付いたこと背景には、先にも記した通り、異世代の、また立場の異なる人々との関わりの中で、相手に共感し、深く理解しようと考えた経験を繰り返したことがあったのではないかと考えられる。授業の中で筆者らは、訪問先の母親や子どもたちに気持ちよく迎え入れてもらうことをい

つでも考えるよう指導している。そうしたことも、人の立場に立って物事を考えるきっかけとして機能したのかもしれない。

さらに本研究の結果からは、本実習への参加がもたらした効果を認識している人が最も多いのは、対人関係の面においてであることがわかった。内容を細かくみると、先の仕事の面での内容と似通っているところが多く、一つはスキルに関して、もう一つは、相手の気持ちの理解やそれに即したふるまいができるようになったことに関しての記述があった。親子だけに限定されたものではなく、他者一般に対して、相手の立場や気持ちを考えることの大切さを学んだという記述も、先の仕事に関する内容と共通していた。

さらに印象に残ったのは、身近な友達や家族（兄や姉）に、子どもが生まれてまさに子育て中の人がいるという記述内容が多数含まれていた点であった。卒業から数年がたち、周囲にそうした子育て世代の人があられ始めたこと、また自分もそういう世代に一步一步近づいていることを実感するような機会が増していること、つまり在学中より格段に自分の結婚や子育てが身近になりつつあることを想像させる内容であった。

以上のことと関連して、将来と今、過去の育てられ経験と今の自分の生活とを関連付け、長い時間軸の中で自分の人生や生活、人とのつながりを意識するような記述がみられた点はいへん興味深かった。これもまた、異世代の人々との関わりがそうしたものの見方を提供したことを示唆するものであった。

## 5. 今後の課題

すでに述べたことも含め、ここで本研究の限界について簡潔に述べておきたい。まず一つには、本研究はたしかに縦断研究ではあるものの、卒業からの年数経過には大きな分散があり、そのうえ一時点だけの振り返りを行ったのみであった。今後は、実習を経験した直後や卒業時点、さらには卒業後一定の年数が経過したのちまで含め、いくつかのポイントに照準を合わせた定点観測を検討したい。そうすることで、実習で経験した何がどの時期に役に立っているのか（あるいは役に立っていないのか）を詳しく検討することが可能になるものと思われる。いくつかの設問に関しては「覚えていない」と回答されたものがあり、その回答者には27、28歳の、卒業から比較的年数が経過した人も多数含まれていた。

時期をこまめに設定することでこうした問題も解消されるものと思われる。

さらに本稿では、「役に立った」と回答された点だけに焦点を当てた分析を試みたが、改めてデータを見ると、就職活動、仕事、対人関係のいずれの面においても「役に立たなかった(立っていない)」とする回答も一定数あった。データをさらに蓄積しながら、どういう人に役に立ち、どういう人には役に立たないのか、といった分析を進めるべきであろう。また、そうする中で、本実習をさらに充実させていくための手立てやヒントが得られるかもしれない。

## 6. まとめと展望

改めて、学生子育てサポート活動への参加が長期的にみて、参加者にどのような影響をもたらすかについては、大きく3つにまとめることができよう。一つは、道具的な効果、あるいはスキルの向上である。就職活動において自己PRに利用したこと、仕事、プライベートの両面において、子どものいる人との関わりかたやコミュニケーションのとり方を学んだこと、などがこれに該当しよう。第二は、人の気持ちや立場に身を寄せ理解しようとする姿勢、あるいはそれに沿った関わり方ができるようになったという記述である。仕事において、あるいは身近な人々との関わりに関して、これに該当する記述が多数みられた。三つめは、自分の人生を長い時間軸に即してみつめるようになったといった記述である。自分もまた発達過程の一つひとつ歩みつつ、以前ならば全く違う立場であった人が今や自分と無関係ではないこと、自分もまたその世代に少しずつ近づいていることが、こうしたものの見方に関係しているのではないかと想像された。

本稿の前半でも触れたが、われわれが日常生活を過ごす具体的な場、文脈は、自分がどの世代に属しているかによって大きく異なり、一つのコミュニティで生活していながらも、世代や立場の異なる者どうしが接する機会は驚くほど少なくなっている。それぞれの世代の人、立場の人々はそれぞれの生態的な場(ニッチ)にいて重なりあうことが少なく、目に見えない“棲み分け”のような状況が生まれているように筆者には思える。

筆者らがスタートした学生子育てサポート活動は、そうした垣根を取り払い、多世代、異世代の交流を生み、それぞれの人々がそこから刺激を受けながら

結果的に互いの育ちを促す、相互の「育て合い」の実践と位置付けることができるのではないか。今後、本実習への参加者をさらに長期にわたってフォローし、自分が今度は子育てをする立場に回ったときに、この活動がどのように振り返られるのかといったところまで追跡していきたい。

## 謝辞

本活動の実施・運営にあたっては、天白子ネットの吉岡美夏さんにいつもお世話になっています。記して感謝申し上げます。

## 引用文献

- Amsterdam, B. (1972). Mirror self-image reactions before age two. *Developmental Psychobiology*, 5, 297-305.
- 藤原佳典 (2012). 世代間交流における実践的研究の現状と課題 - 老年学研究の視座から - *日本世代間交流学会誌*, 2, 3-8.
- 藤原由美子・猪野郁子 (2002). 中学生の幼児ふれ合い体験学習に関する研究 *島根大学教育学部紀要 (教育科学)*, 36, 27-35.
- 原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援 愛知: 名古屋大学出版会
- 伊藤篤・塚本美由紀 (2015). 子育てひろばにおける青少年の養護性育成を目指した体験学習の意義: 「0歳児ふれあい体験」と「赤ちゃん人形プログラム」の比較 *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 9, 57-71.
- 鎌野育代・伊藤葉子 (2008). 中学校家庭科における幼児とのふれ合い体験の教育的効果をどのように高めていくのか - アクションリサーチによる検討 *千葉大学教育学部研究紀要*, 56, 201-208.
- 金田利子 (2005). 社会とヒューマニズム: 子育て支援と次世代育成における異世代交流の相互発達の意義と効果に関する研究 (2005年度研究助成金成果報告) *白梅学園大学 短期大学 教育・福祉研究センター研究年報*, 11, 100-102.
- 川村千恵子・森圭子 (2006). 地域で生活する母子との交流における看護学生の体験 *母性衛生*, 46, 608-616.
- 川瀬隆千 (2009). 学生保育サポーター事業のプログラム評価 *宮崎公立大学人文学部紀要*, 16, 45-62.
- 糊澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 *教育心理学研究*, 57, 168-179.
- 大路雅子・松村京子 (1998). 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究 (第1報): 特徴的対児行動 *日本家庭科教育学会誌*, 41, 31-38.
- 小島康生 (2013). 「親になること」再考: 子育ての生態学序説 *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 13, 1-10.
- 小島康生・水野里恵・塚田みちる (2011). 高校生を対

- 象とした赤ちゃんとのふれあい体験実習の効果：赤ちゃんイメージと子ども・子育て観における変化  
中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 11, 15-27.
- 草野篤子 (2004). インタージェネレーションの必要性  
現代のエスプリ, 444, 5-8.
- 三林真弓 (2005). 臨床心理的地域援助の実践と研究  
鐘幹八郎 (監修) 川畑直人 (編) 心理臨床家アイデンティティの育成 - 心理臨床家としての育ちの観点から (pp. 227-241) 大阪：創元社
- 文部省 (1999). 中学校学習指導要領 (p. 86)
- 文部省 (2000a). 高等学校学習指導要領 (p. 136)
- 文部省 (2000b). 中央教育審議会報告「少子化と教育について」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/1309769.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309769.htm)  
(2017年6月9日取得)
- Newman, S. (1997). History and evolution of intergenerational programs. In S. Newman, C. R., Ward, T. B., Smith, J. O. Wilson, & M. J. M. (Eds.), Intergenerational programs: Past, present, and future. Washington, DC: Taylor & Francis (pp. 55-79).
- 岡田恵子 (2007). 医療保育科学生の保育所実習前後の子どもイメージ, 心理社会的発達の変化とこれらの関連性 川崎医療福祉学会誌, 16, 377-384.
- 岡野雅子 (2005). 乳幼児とのふれ合い体験についての一考察：大学生の省察資料による検討 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』, 6, 1-10.
- 岡野雅子 (2006). 中学生・高校生の保育体験学習に関する一考察：幼稚園・保育所側から見た課題 信州大学教育学部紀要, 117, 25-36.
- 佐藤洋美 (2004). 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響 生活体験学習研究, 4, 35-54.
- 谷向みつえ (2010). 子育て広場における臨床心理学実習の実践報告：大学生の親性教育の試みについて 総合福祉科学研究, 1, 243-248.
- 藤後悦子 (2007). 子どもへのナーチュランス (養護性) を育む発達教育プログラムが中学生の学校生活, 地域関係に与える効果 保育学研究, 45, 210-220.
- 吉村真理子 (2006). 高校生への子育て理解講座 - 千葉県立佐倉東高等学校での実践を通して - 千葉敬愛短期大学紀要, 28, 141-152.